

港湾海岸防災協議会研究会

企画展「関東大震災100年
船と港から見た関東大震災」を開催して
～災害・防災を「わがこと」としてもらうために～

横浜みなと博物館学芸員 三木綾

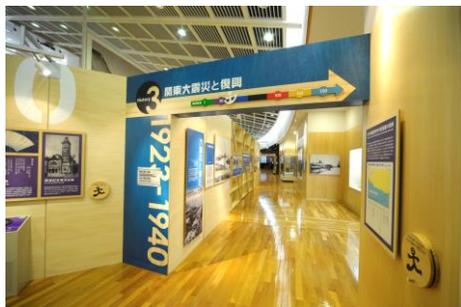
横浜みなと博物館

横浜みなと博物館は横浜港をテーマにした博物館です。

「歴史と暮らしのなかの横浜港」をメインテーマに、横浜港に関する調査・研究、資料・図書の収集・保存、展示・公開、教育活動を通して、横浜港を知り、考え、楽しむことができる博物館をめざしています。

■ 横浜みなと博物館の災害・防災関係の展示 ■

- ・常設展示室3「関東大震災と復興」
- ・常設展示室7「現在の横浜港」内「安全・安心で環境にやさしい港」



企画展 関東大震災100年 船と港から見た関東大震災



- ・会期: 2023年8月26日(土)～11月5日(日)
- ・会場: 横浜みなと博物館特別展示室



2023年8月26日(土)～11月5日(日)

【休館日】月曜日(9月18日(月・祝)、10月9日(月・祝))は開館し、翌平日は休館

【開館時間】10:00～17:00(最終入館16:30)

【入館料】一般500円 65歳以上400円 小・中・高校生200円(博物館入館券)

※祝日日本丸との共催展(一般800円、65歳以上600円、小・中・高校生300円)で本展もご覧いただけます。

※所要時間(小・中・高校生は半通券が100円の特典料金となります)。※本展のみ見学できる入館券(一般200円、小・中・高校生・65歳以上100円)もございます。

【交通】JR根岸線、市営地下鉄ブルーライン桜木町駅下車、みなとみらい線みなとみらい駅・馬車道駅下車 いずれも徒歩5分

【助成】みなと博物館ネットワーク・フォーラム、一般財団法人山縣記念財団

【後援】横浜市港務局、(一社)横浜港振興協会、神奈川県博物館協会、神奈川県新聞社、テレビ神奈川

 横浜みなと博物館
Yokohama Port Museum





震災時横浜
港で救助に活
躍した日本郵
船三島丸の
号鐘



震災被害
図や救助
にあたった
船の写真を
展示



横浜市の最
新の防災へ
の取り組みを
動画で展示



非常持ち出し
袋に何を入
れるか、実物
で紹介

企画展「関東大震災100年 船と港から見た関東大震災」で めざしたこと

- 震災発生時、横浜港に停泊していた船舶の救援活動について、具体的に明らかにする。
- 避難民輸送、救援物資輸送にあたった商船、艦艇の動きについて、具体的に明らかにする
- 横浜港復旧工事(応急工事、内務省による震災復旧工事、大蔵省による震災復旧工事)について、新出資料も含めて紹介する
- 東京港・神戸港・清水港の関東大震災を契機とした性格の変化、横浜港との関係性について考察し、紹介する
- 現在の横浜港の震災に対する取り組みを国際コンテナ港湾という性格も含めて紹介する
- 最新の横浜市の防災への取り組みや防災グッズなどを展示し、災害を「わがこと」に、防災を「身近に」感じてもらう

■企画展概略

震災前の横浜港

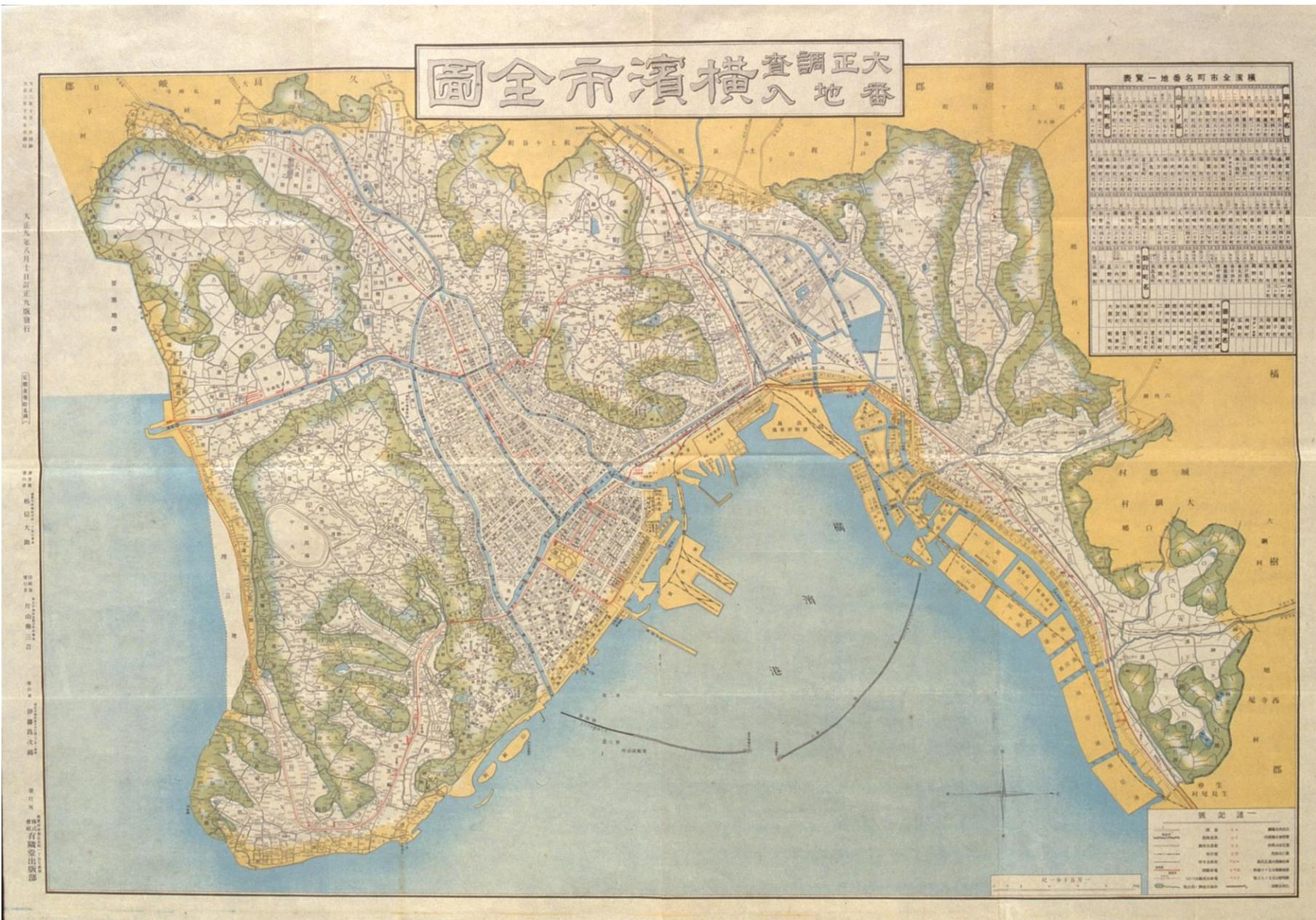
■開港から50年以上が経過し、大さん橋・新港ふ頭が完成、近代的港湾としての設備を整える。

■さらなる拡張のため、外貿ふ頭として瑞穂ふ頭、内貿ふ頭として高島・山内ふ頭を造成する
第三期築港工事着手

・横浜港の貿易量は順調に増加していたが、横浜開港から8年後に開港した神戸港が、綿織物の輸出や工業化を軸に貿易量を伸ばし、急速に横浜港を追い上げていた(1893(明治26)年、輸入額で横浜港を抜く)。

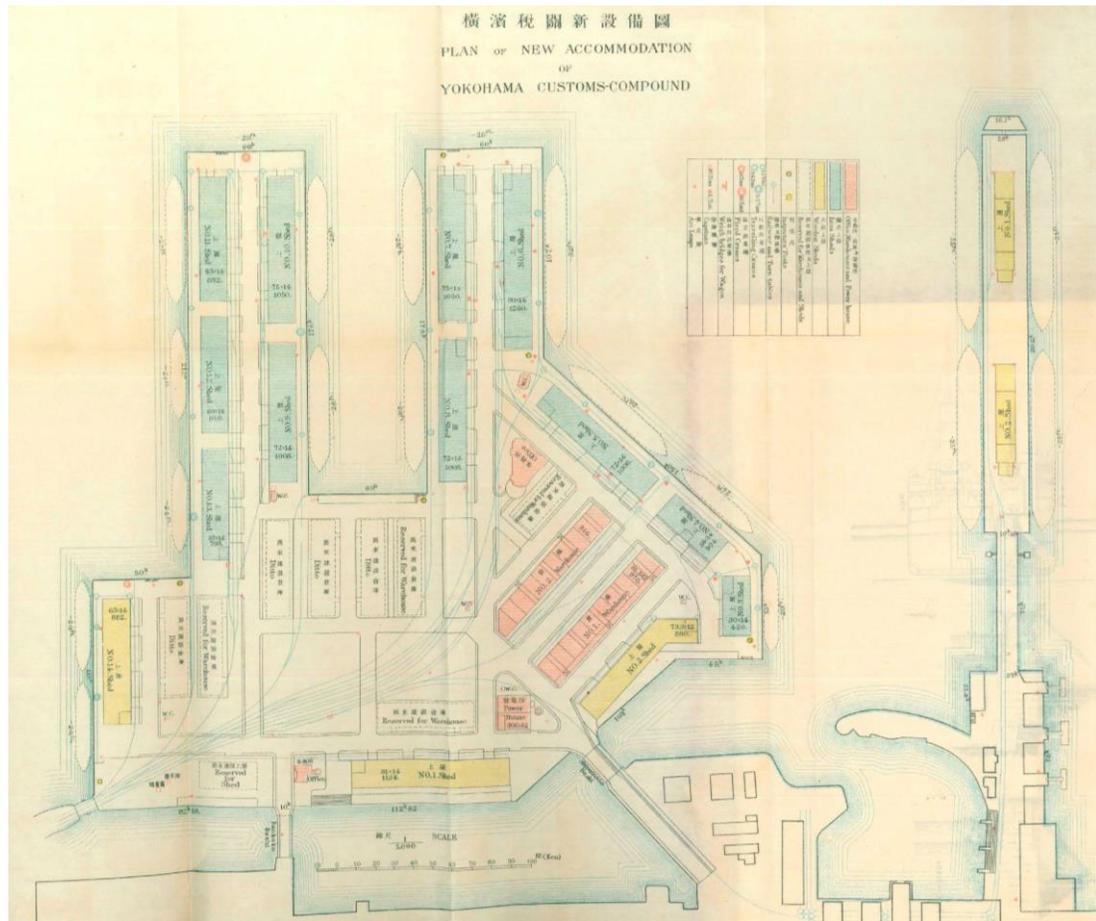
・東京港は外国貿易港として開港していないものの、内国貿易の港として取扱貨物量を伸ばしていた

大正調査番地入横濱市全圖



大正調査番地入
横濱市全圖
1920(大正9)年

地図の中央辺りが横浜港。大さん橋、新港ふ頭、防波堤、泊地が完成し近代的な港湾設備が整っている。図の右側部分、海沿いには守屋町、千若町など初期の埋め立て地が広がる



横濱税関新設備図 1917(大正6)年『横濱税関新設備報告』より 完成した大さん橋と新港ふ頭の陸上設備。ふ頭の中を走る鉄道、重量物用クレーン、鉄製の上屋など充実した設備を持つ



拡張工事が完成した大さん橋全景 1917(大正6)年『横濱税関新設備写真帖』より
大さん橋は第二期築港工事の中で拡張された。幅はほぼ倍となり、拡張部分には鉄筋コンクリートの円柱が使われ強度が増した。この部分が関東大震災でも陥落せずに残った。棧橋上に見えるのは1917(大正6)年に完成した2棟の上屋

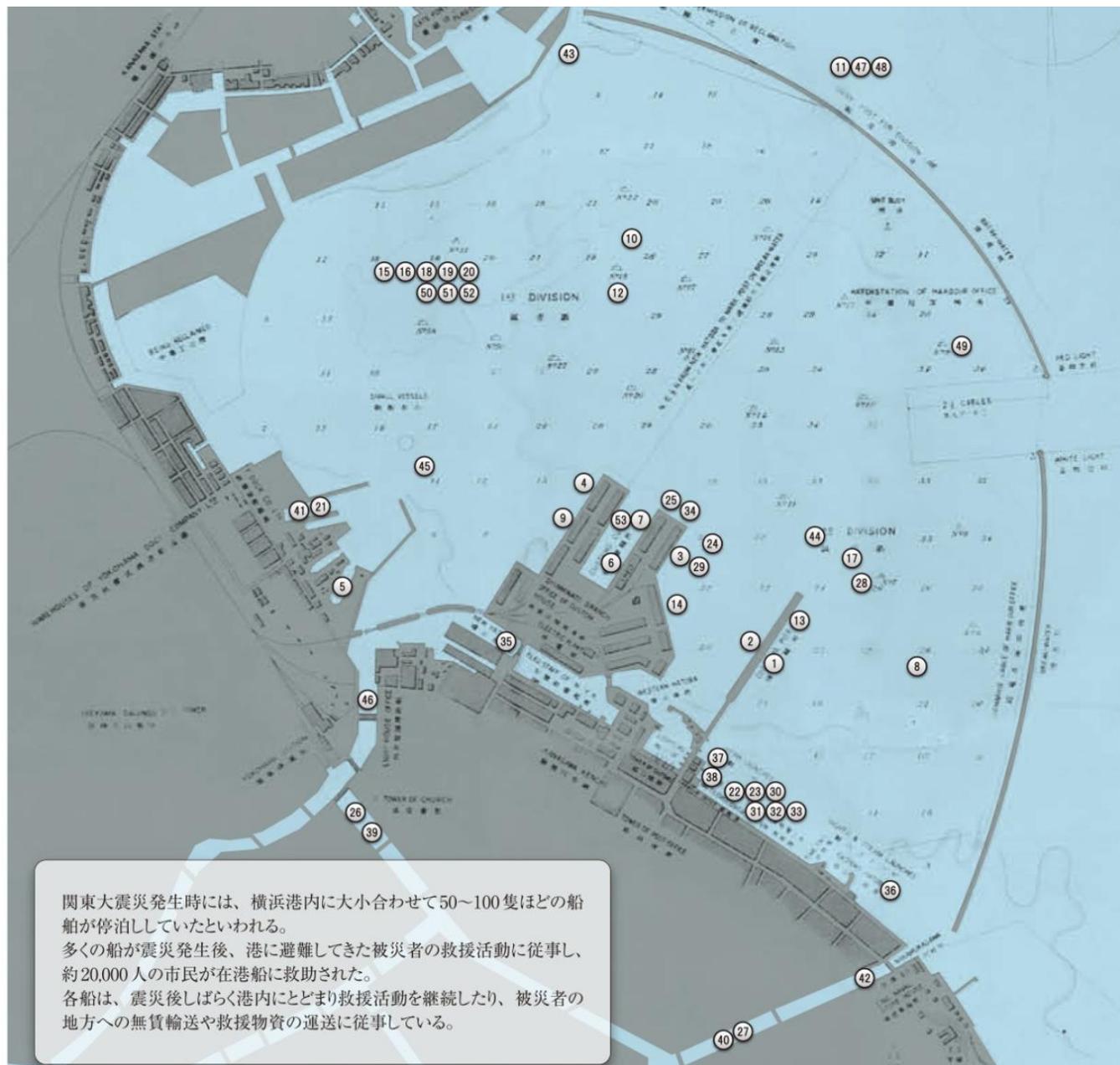


地震発生直後の横浜市街地 1923(大正12)年
『横浜市震災記念館写真帖』より
地震発生から約5分後の写真。倒壊した家屋から逃れようとする人々が確認できる

■企画展概略

船による救助活動

- ・震災発生時、横浜港には大小合わせて50～100隻ほどの船がいたとされる
- ・大さん橋には、エンプレス・オブ・オーストラリア(CPL)、アンドレ・ルボン(MM)など3隻、新港ふ頭には、三島丸(NYK)、ぱりい丸(OSK)、ろんどん丸(OSK)、など10隻近くが停泊、港内の錨地にも多くの船がいた。
- ・個々の船が、自発的に横浜港に避難してきた被災者を救助する。
 - 実際には何隻の船がいたのだろうか？
 - 各船はどのような活動をしたのだろうか？



①	エンプレス・オブ・オーストラリア
②	アンドレ・ルボン
③	これや丸
④	三島丸
⑤	りま丸
⑥	ぱりい丸
⑦	ろんどん丸
⑧	りおん丸
⑨	丹後丸
⑩	寶永山丸

船名	船会社	総トン数	活動内容
寶永山丸	三井物産	6,079総トン	約400名の被災者を船内に救助
セミラミス	サミュエルサミュエル商会	5,792総トン	多数の被災者を救助。ベンジン油満載であったため港内航行の各発動機艇に運転用の油を無償配給
綾葉丸	辰馬汽船会社	5,724総トン	1日午後8時ごろまでに被災者約70名を救助し、8日まで炊き出しを行った
ベングロー	英国汽船	5,318総トン	被災者137名を救助。9月5日まで船内で留め置く
甲陽丸	神戸棧橋	3,010総トン	被災者20名を救助
日英丸	濱口汽船	2,233総トン	被災者180名を救助
中華丸	山下汽船会社	2,191総トン	1日午後9時ごろまでに被災者約150名を救助。4日まで炊き出しを行った
大進丸	内田汽船	989総トン	被災者10名を救助
筑波丸	日本郵船	3161総トン	被災者102名を救助し炊き出しを行った
永代丸	日本郵船	94総トン	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の救助と送迎にあたった
鶴見丸	日本郵船	93総トン	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の救助と送迎にあたった
吾妻丸	東洋汽船	38総トン	これや丸と協力し、被災者1,082名救助
桂島丸	大阪商船	32総トン	米大使館員婦人他100余名を救助し棧橋方面に避難
金剛丸	共同運輸会社	28総トン	柳橋付近で川に流されてきた被災者を霧島丸とともに救助。約800名を救助し炊き出しを行った
第1湊丸	野口寅吉	26総トン	被災者約300名をエンプレス・オブ・オーストラリアに移送。2日から10日まで被災者の無賃輸送に従事
末広丸	関東運輸会社	20総トン	被災者約150名を湖南丸に移送
都丸	(不明)	小型蒸気船	これや丸と協力し、被災者1,082名救助
柳丸	日本郵船	小型蒸気船	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の救助と送迎にあたった
栄平丸	日本郵船	小型蒸気船	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の救助と送迎にあたった
雲雀丸	日本郵船	小型蒸気船	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の救助と送迎にあたった
妙見丸	日本郵船	小型蒸気船	沖合の船と海岸通りを結ぶ連絡船として被災者の救助と送迎にあたった
桜島丸	大阪商船	小型蒸気船	米大使館員婦人他100余名を救助し棧橋方面に避難
新天丸	山口舩船部	小型蒸気船	東波止場裏手付近で海中から36名を救助
スペンドリフ	山口舩船部	小型蒸気船	東波止場裏手付近で海中から36名を救助
舩船第294号	ヘルム商会		港内での救助活動に従事
舩船第309号	ヘルム商会		港内での救助活動に従事
霧島丸	国際運輸会社		柳橋付近で川に流されてきた被災者を金剛丸とともに救助。約800名を救助し炊き出しを行った
まつ丸	湊組		本町4丁目付近川岸に係留中罹災。被災者約180名を東洋汽船これや丸に移送。
六甲丸	日本郵船		被災者31名を救助し炊き出しを行った
明治丸	明治運輸		谷戸橋、前田橋付近で、被災者60名を救助
第6保存丸	吉田回漕店		東高島駅構内石炭貯蔵所付近で被災者100名を救助。横浜船渠停泊中の南洋丸に移送した
福丸	関東運輸会社		被災者約30名を他船と山下町埋立地に移送
大川丸	村山回漕店		漂流してきた母子を救助。その後漂流した舩に乗っていた約30名の被災者を大阪商船湖南丸に移送した
第11号旭丸	旭組回漕店		被災者40名ずつ合計約300名を日本郵船三島丸に移送
アイリッシュ	サミュエルサミュエル商会		多数の被災者を救助。ベンジン油満載であったため港内航行の各発動機艇に運転用の油を無償配給
チサラク	ウィルスム商会		1日夕刻までに被災者約900名を救助。3日東京芝浦に向けて被災者輸送

・救助活動の詳細は不明なもの『横浜復興録』には、ドンゴラ、ヤシラシス、リュカン、帝海丸、夕張丸、鳥羽丸、鹿山丸、東華丸、榛名丸、ウエーゼル丸、しどにい丸、新嘉坡丸、嘉代丸、みかど丸、国後丸、吾妻山丸、チキニー、チボツク、伊勢丸、松山丸、第二養老丸、対馬丸、羅州丸、南洋丸、シカド丸、まらっか丸等50余隻の船が震災発生時横浜港内にいたという記載がある

・『横浜市震災誌 第5巻』、「遭難記と見聞誌」の中にも、「青筒汽船」、「(二)米國の汽船セールと云ふ船、(三)自分達の乗つて居た英國汽船俗に十五番と云ふ(ピーオー汽船の船)」などの記載が見える。

→船名が分かっている船だけでも80隻余り。船名が記録されていない船や、運河や舢溜まりにいた船も合わせれば相当数の船が救援活動に従事した

→各船、船上に被災者を救助し、自船の搭載している水や物資、貨物、医療を提供する。小型船は陸上と海上の船を結ぶ

→船は陸上設備に被害があっても、自らの機関を使って無線通信や海上移動ができること、大量の物資・人を運べる輸送力があることなど、海上の独立した交通機関である船舶の特徴が関東大震災という未曾有の大災害時に大きな役割を果たした

→港があったことで救われた命も多かった

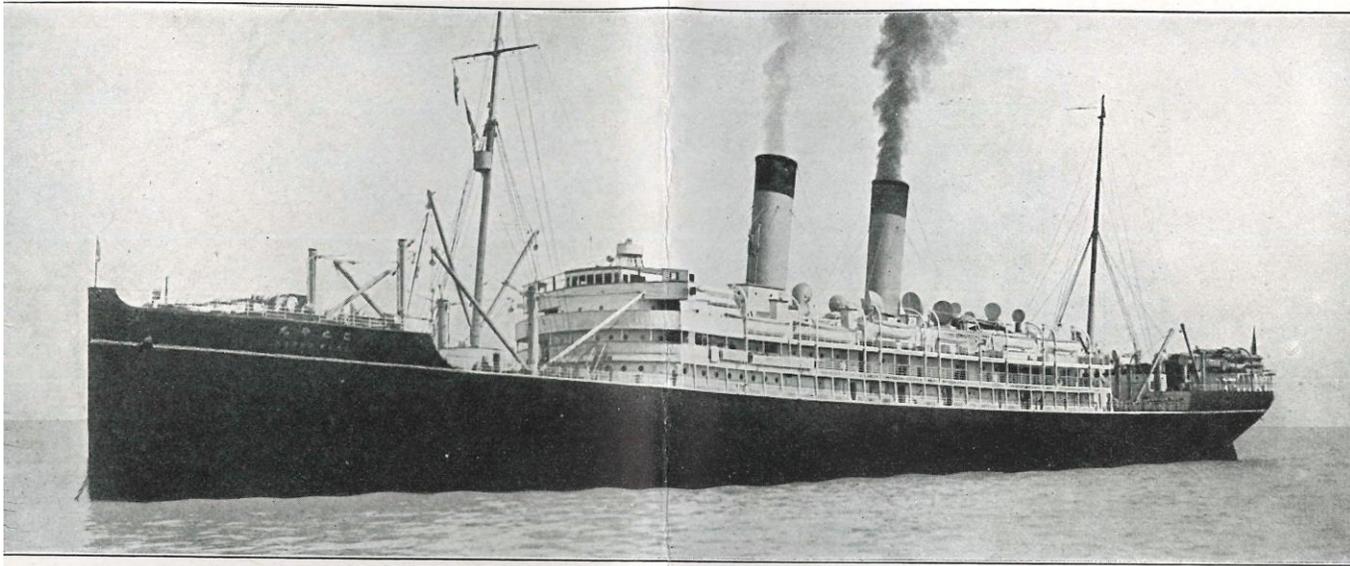
震災発生の際は横浜港から

・神奈川県警部長森岡二郎がこれや丸から大阪府・兵庫県・千葉県・茨城県の各知事、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社に宛てた至急官報で救援を要請。銚子無線局と潮岬無線局が中継した。これが関西地方に関東大震災を公式に報じる第一報となる。

・森岡警部長は、あわせて横浜港内停泊の各船長宛に、陸上の罹災者救助のため炊き出しの必要あり、とし食料・貨物米の提供を無電する(『神奈川県下の震災火災と警察』より)

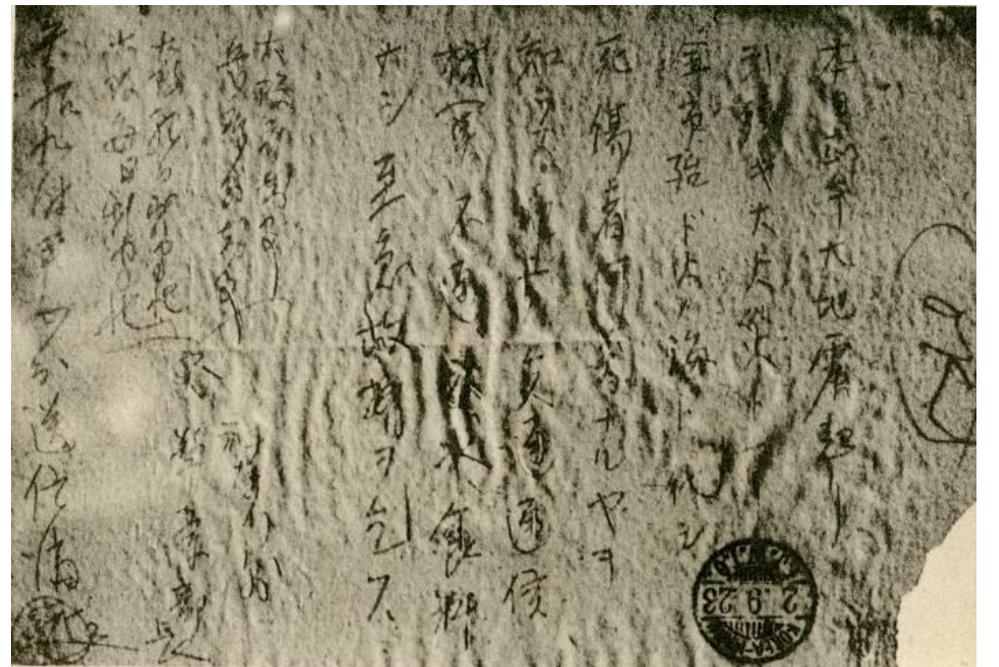
大阪朝日新聞に掲載されたこれや丸発の電報
1923(大正12)年 大阪朝日新聞
国立国会図書館蔵



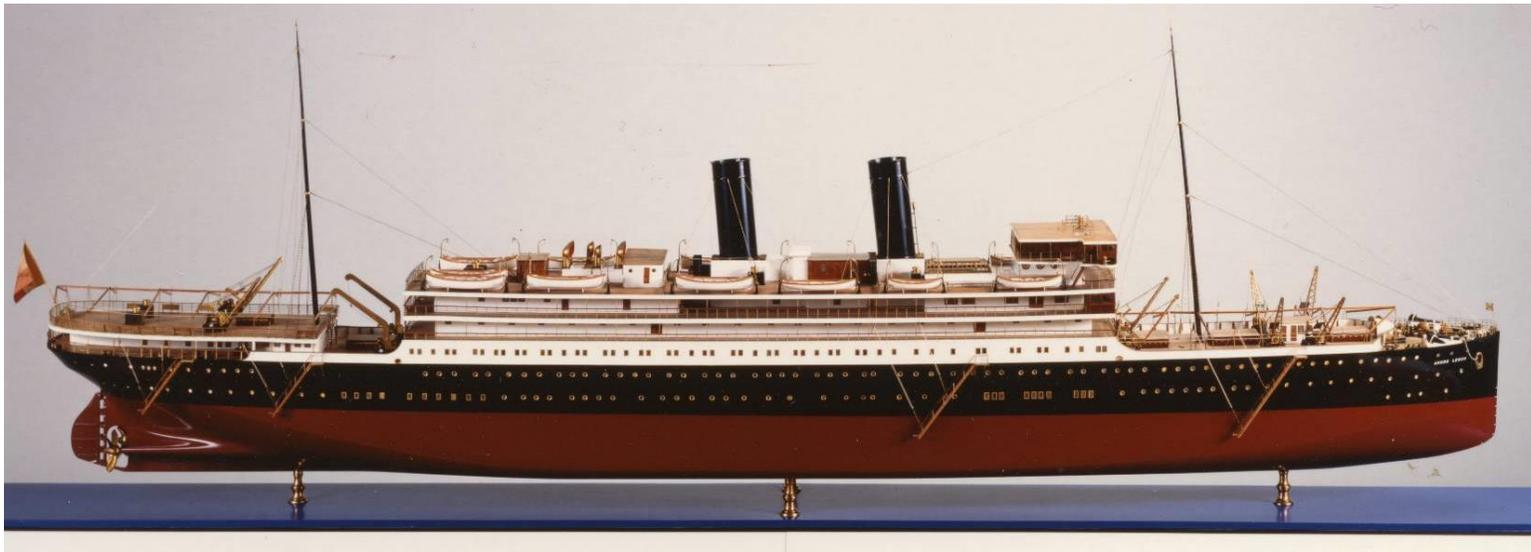


震災発生第1報を打電した東洋汽船の貨客船これや丸

本日正午大地震起り。引き続き火災を起こし、全市殆ど火の海と化し、死傷者何万なるを知らず。交通通信機関不通。水食料なし至急救護を乞う。
(後略)



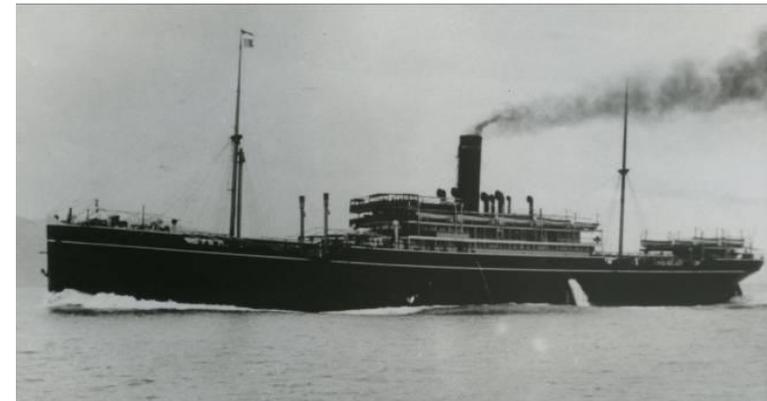
これや丸から発信された震災発生第1報の電報の原稿



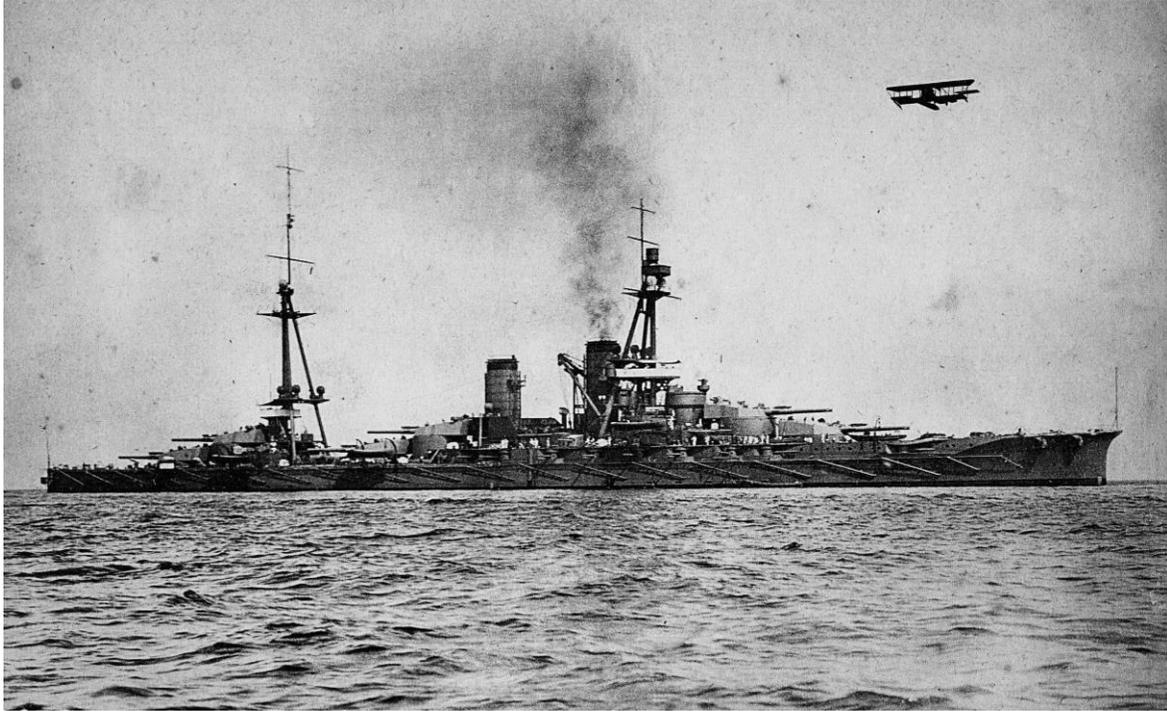
アンドレ・ルボン(メサ
ジュリ・マリタイム(仏))
13,682総トン 1日夕方ま
でに約2,000名を収容。
11日神戸に向け、被災
者約1,000名を無賃輸送



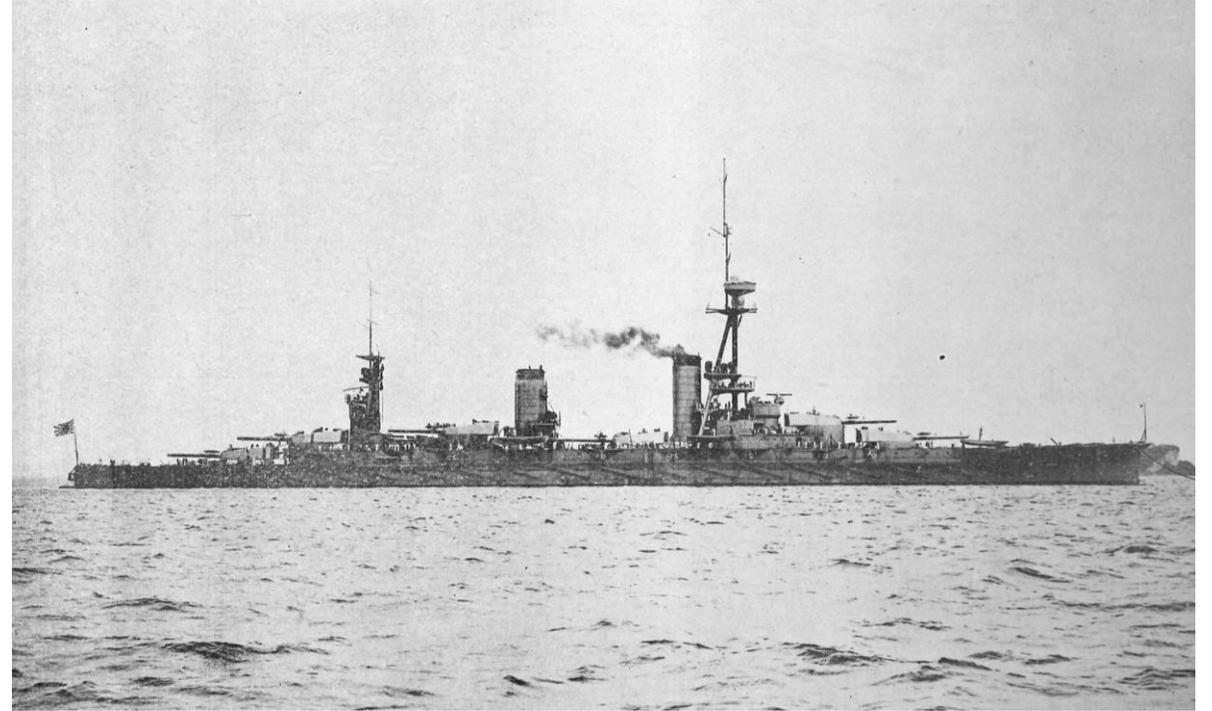
ぱりい丸(大阪商船)7,197総トン 1,800名
余りの被災者を船内に救助し、港外に避
難。船倉内の米800トンを供出。横浜港停
泊中、神奈川県・大阪府の救護本部となる



三島丸(日本郵船)7,904総トン 延べ
4,000名の避難者を収容。港務部、税
関海事部等の事務所が置かれ、海上
行政の中心となる



戦艦 伊勢 連合艦隊第一艦隊 33,800排水トン
9日横浜入港、港内の搜索、救護品陸揚を実施。10日
第三戦隊旗艦となる



戦艦 山城 横須賀鎮守府 30,600排水トン 9月3日
から横浜の警備、救護作業に従事。大さん橋の応急修
理、港務整理、避難民への糧食・飲料水配給、在港船
舶の無電管制などを実施。

- ・関東大震災の救護に派遣された海軍艦艇は、連合艦隊、練習艦隊、横須賀、呉、佐世保の3鎮守府所属の艦艇をあわせて150隻、兵員約3万人
- ・横浜には2日夜から3日にかけて、横須賀鎮守府の駆逐艦 初霜、響、有明、呉鎮守府の二等駆逐艦 萩が被災状況の把握、警備のため横浜に入港。3日朝には軽巡洋艦 五十鈴から陸戦隊が上陸、警備や救助活動を開始。
- ・横浜では連合艦隊第一艦隊のうち第三戦隊が主に糧食の陸揚げ・救護・警備にあたった。
- ・横浜での救援活動の中心となったのは戦艦伊勢と山城。伊勢は旗艦として港内の警備と被災者救護、港内捜索、救護品陸揚げ、山城は救助作業の他に大さん橋の応急修理、在港船舶の無電管制などを実施。
- ・全国から送られる救援物資の陸揚げは海軍が担当した。海軍艦艇は避難民輸送にも従事し、京浜地方からは総計60,000名近くが地方へ輸送された。
- ・関東大震災では、海上からの監視や陸上の警備による治安の維持、膨大な量の物資輸送、避難民輸送、港内や水路の状況調査を行うため海軍の艦艇が大きな役割を果たした



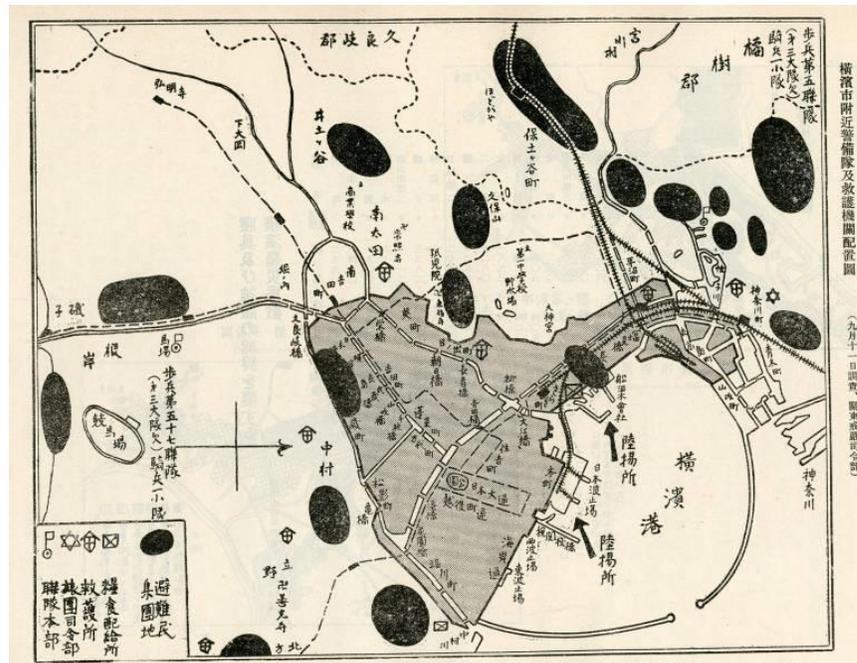
野毛山から見た横浜市内(部分) 1923(大正12)年 4枚続きの絵葉書のうちの一部。海上に20隻近い船が見える。横浜船渠付近は救援物資の陸揚場であったため、この付近に停泊している船は救援物資輸送の船と思われる

■企画展概略

救援物資横浜港へ



大阪港で救援物資を積込む特務艦室戸 1923(大正12)年 『関東大震災画報 第2集』より

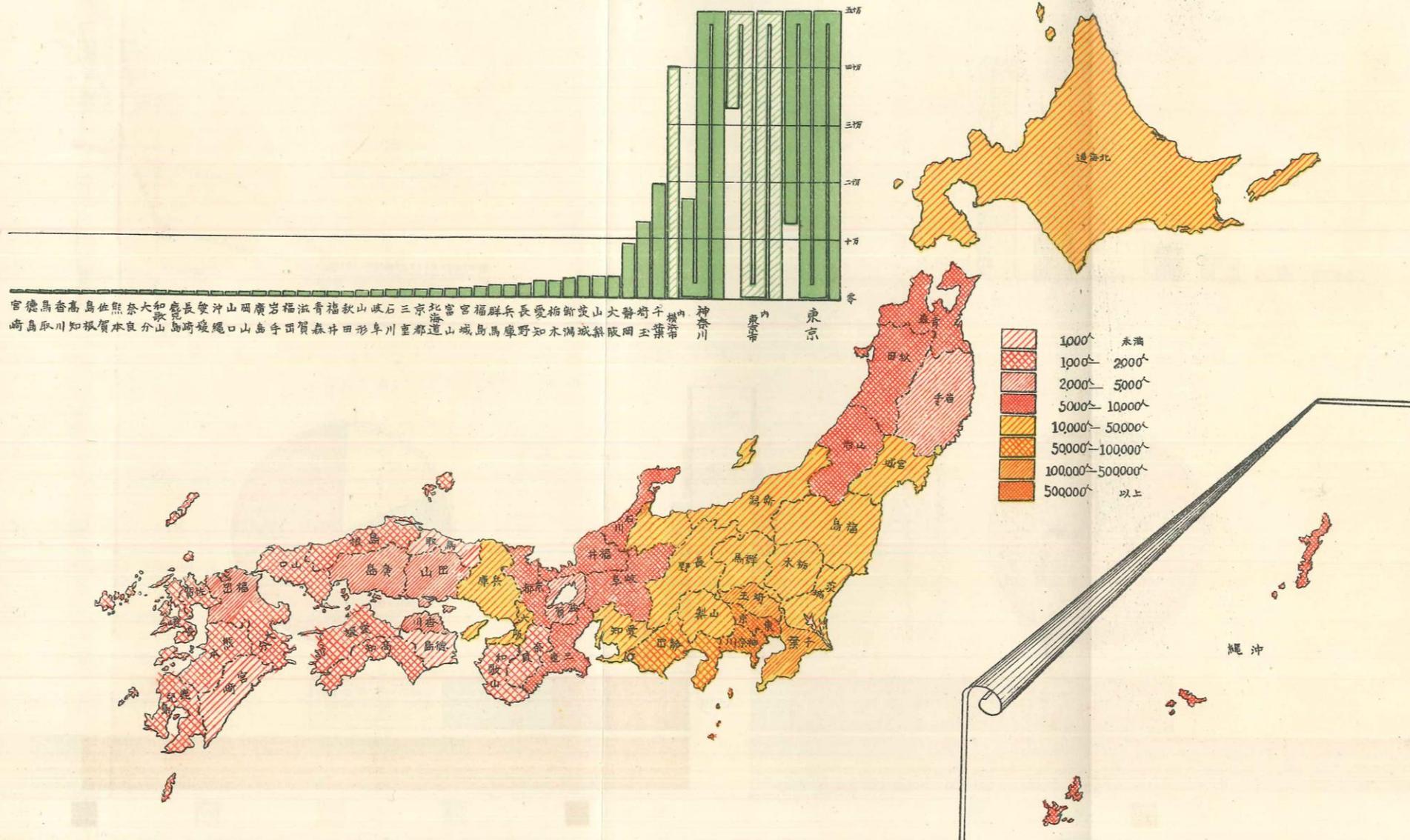


臨時に設置された貨物の陸揚げ場 1923(大正12)年 『関東大震災画報 第2集』より

入港・ 陸揚月日	船名	仕出港	積荷
9月3日	阿蘇丸	名古屋	救恤品、白米60俵、たくあん10樽、陶器
9月4日	しかご丸	大阪	大阪方面の食料、救護材料
	三号駆逐艦 ※		糧食250袋
	対馬丸	カムチャッカ	鮭缶詰4,000箱
9月5日	山城丸	神戸	救恤品、白米215トン、麦粉250トン、味噌90樽
	竹島丸	新潟	白米295俵、味噌30樽、醤油30樽
	天龍 ※		砂糖入乾麵包553箱、貯蔵獣肉、コーンビーフ390箱、ローストビーフ180箱、貯蔵魚肉470箱、特種貯蔵獣肉650箱、乾パン3,000貫、牛肉缶詰5,000貫、三本引320貫、梅干し25貫目
	筥崎丸	神戸	白米
	備後丸	神戸	食料品(トン数不明)
	室蘭丸	大阪	砂糖2,970俵(200トン)、梅干100樽(20トン)、慰問袋310個
	ろんどん丸	大阪	日本米25俵、らっきょう1樽、西貢米10袋、小麦粉3俵、醤油11樽、青丹豆4斗、白味噌4樽、食塩3俵、川柳20俵、大根漬6樽、福神漬30箱、梅干5樽、十六豆1斗、大豆4斗、塩乾20貫、海苔佃煮40箱
	不明	岡山	干うどん8箱、そうめん800箱、瓶詰108箱、150樽、沢庵漬け、梅干145樽、馬鈴薯205俵
	不明	千葉	玄米250俵、味噌3樽、塩3俵
	9月6日	あんです丸	
小笠原丸		長崎	馬鈴薯210俵、水産物39箱
長崎丸		長崎	大根漬419樽、らっきょう174樽、梅干30樽、味噌182樽
三島丸			白米1,000俵、塩215俵
熊野丸		神戸	缶詰1,127個、白米6,500袋
9月7日	タキ丸	長崎	精米150俵、ビスケット50箱、漬物22樽
	鳥羽丸	大阪	白米69,452俵、缶詰3,120個、揮発油499個、カーバイト113個、雑貨2,448個、飲料水1,200トン
	三島丸		嗜好食223樽
	明洋丸	神戸	救助米5,841トン
	遼東丸	岡山	馬鈴薯860俵、南瓜308俵

震災罹災者散在状況

大正十三年十一月十五日現在



震災罹災者散在状況 1924(大正13)年「大震から復興への実情」より
 地方へ避難した人々の把握のために、11月には全国で震災避難者人口調査が実施された。関東近県では静岡県や千葉県、関西方面では大阪府、兵庫県などが避難民を特に多く受け入れた

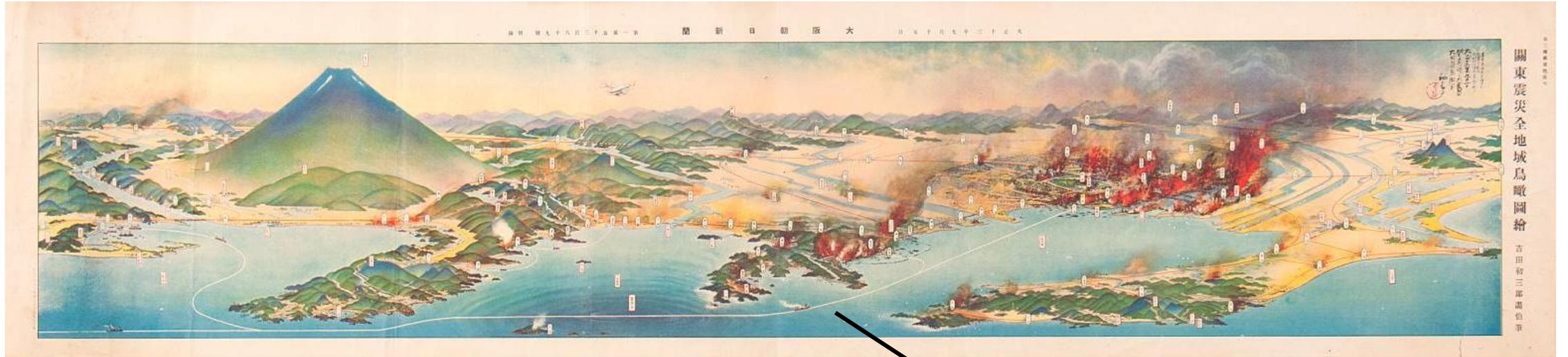


山下町で避難のための船を待つ
被災者 1923(大正12)年 『関東
大震災画報 第2集』より

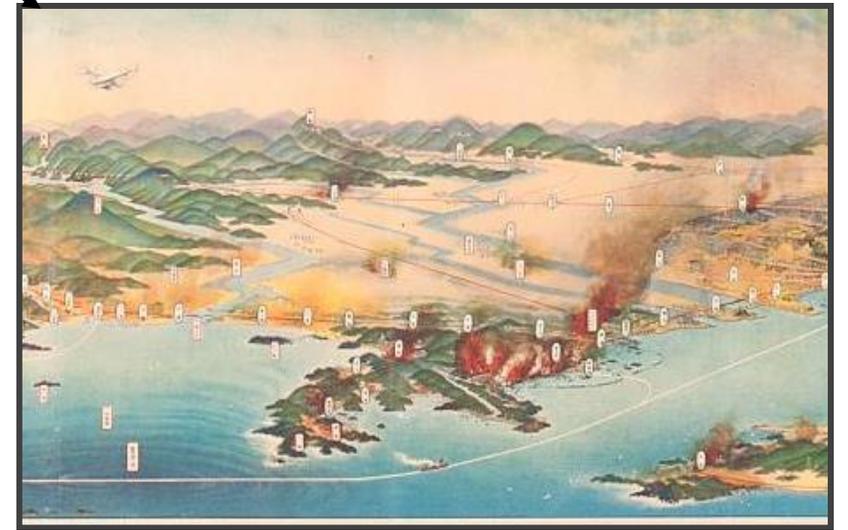


大阪商船の貨客船ろんどん丸で大阪港に避難した被災者
1923(大正12)年 『関東大震災画報 第1集』より

出帆日	船名	輸送避難者数	行き先
9月2日	りおん丸	200 人	大阪
9月2日	エンプレス・オブ・カナダ	1,200 人	神戸
9月3日	安芸丸	100 人	名古屋
9月3日	プレジデント・ジェファーソン	175 人	神戸
9月4日	阿蘇丸	40 人	名古屋
9月4日	りおん丸	82 人	神戸
9月4日	遼海丸	100 人	神戸
9月5日	備後丸	1,200 人	神戸
9月5日	山城丸	613 人	神戸
9月5日	ろんどん丸	922 人	大阪
9月5日	湖南丸	630 人	大阪
9月5日	山城丸	1,000人	神戸
9月5日	ベンリオック	160 人	神戸
9月5日	チサラク	900 人	神戸
9月6日	たすまにあ丸	1,200 人	神戸
9月6日	しどにい丸	1,200 人	神戸
9月6日	東花丸	100 人	清水
9月6日	六山丸	150 人	大阪
9月6日	はるぴん丸	760 人	大阪
9月6日	海静丸	100 人	神戸
9月6日	日英丸	100 人	江尻



關東震災全地域鳥瞰圖 1924(大正13)年
画:吉田初三郎 房総半島から東海地方までの広い範囲の被害が描かれる。図中央が横浜。海上には東京、横浜、清水を結ぶ白線が描かれ、避難や救援のための航路が表現されている



■企画展概略

横浜港の被害

1 大さん橋



崩壊した大さん橋
1923(大正12)年
『横浜税関陸上設備震災復旧工事概要』より

2 新港ふ頭



上空から見た横浜港の被災状況
1923(大正12)年『関東震災地写真帖』より
横浜船渠(左上)から、新港ふ頭、大さん橋と市
街地を撮影した航空写真。新港ふ頭では倉庫が
焼け落ち、甲号倉庫(現在の赤レンガ1号倉庫)
の半分が崩壊している。大さん橋は根元から中
ほどにかけての部分が完全に崩落している



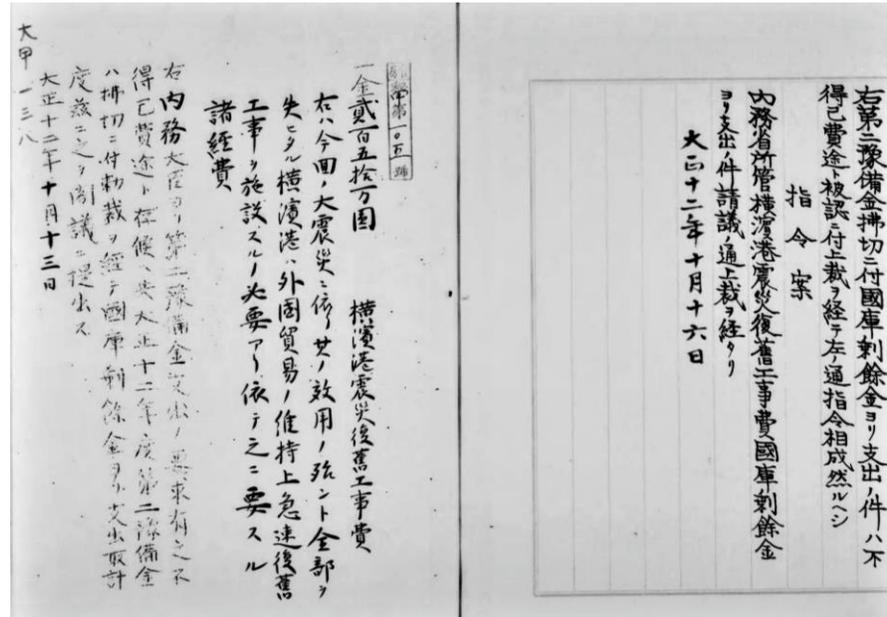
崩壊した新港ふ頭の岸壁 1923(大正12)年
係船柱(ボラード)の位置から、岸壁が倒れたことが
わかる。上屋は完全に倒壊している



崩れ落ちた新港ふ頭岸壁
と上屋 1923(大正12)年
『関東大震大火記念写真
帖』より 手前の岸壁は3
号岸壁。画面手前には倒
れた起重機が見える

2 内務省による震災復旧工事

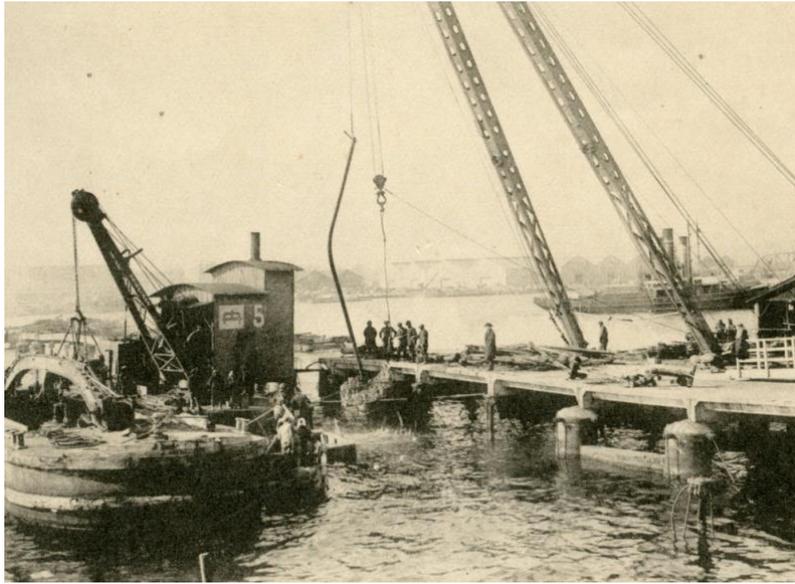
- ・10月16日 横浜港の外国貿易復活のために、内務省が緊急震災復旧工事費を要請、250万円が支出。10月20日着工。
- ・震災発生から約50日後に始まった内務省による横浜港震災復旧工事の開始は異例の速さ
- ・震災前に開始された第三期築港工事を担当していた内務省横浜土木出張所が、震災復旧工事を担当



震災復旧工事に携わった内務省の初代横浜土木出張所所長安藝杏一『横浜港震害復旧工事報告』(1929(昭和4)年)より

内務省所管横浜港震災復旧工事費ヲ国庫剩餘金ヨリ支出ノ件
1923(大正12)年

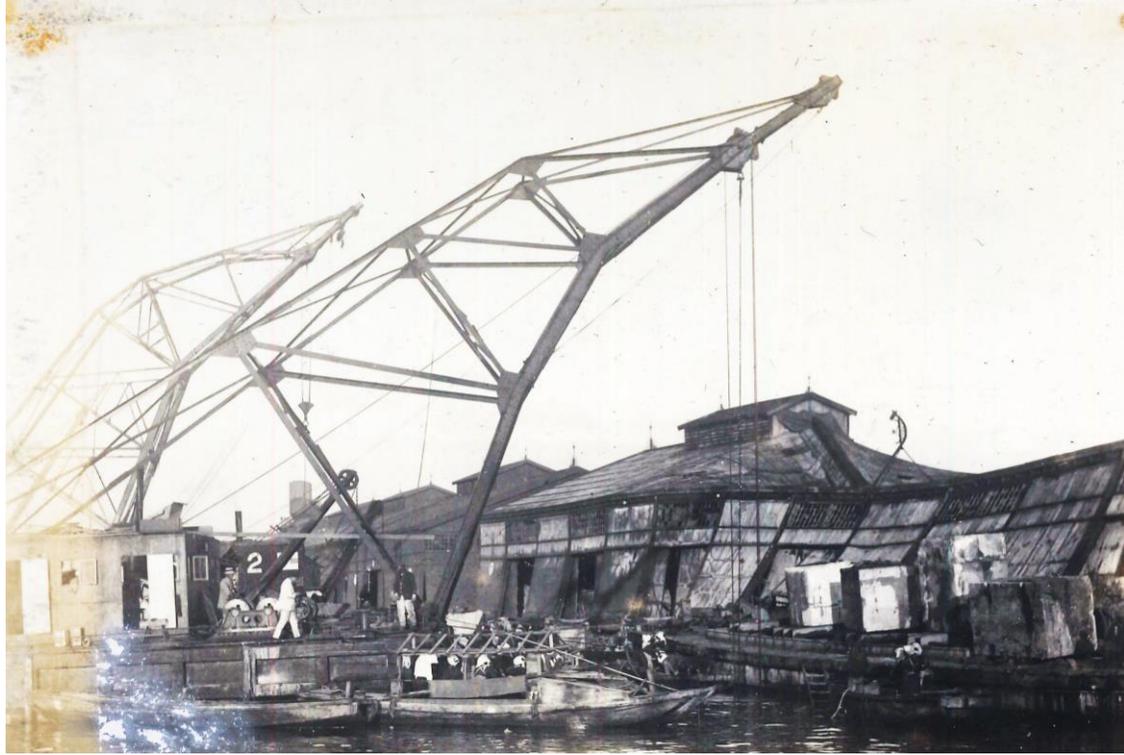
国立公文書館 蔵



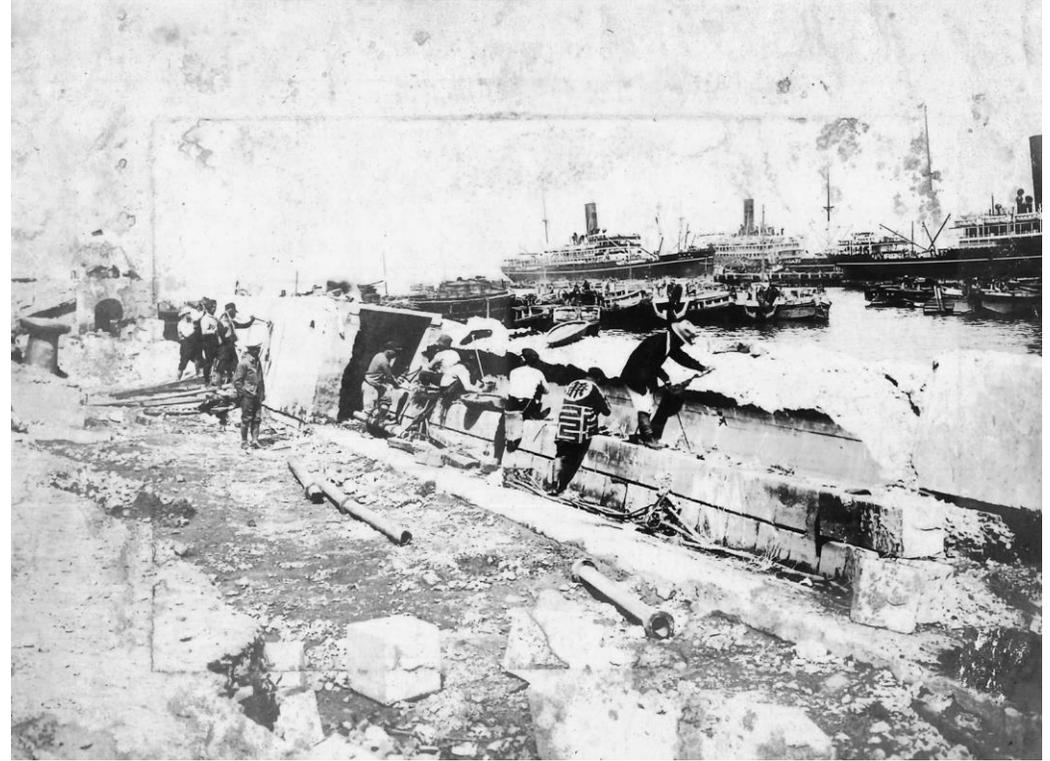
新港ふ頭の岸壁の復旧に使われた鉄筋コンクリート製のケーソン 『横浜港震害復旧工事報告 附震災救護報告』より



(上)湾曲したスクリューパーイル(螺旋杭)を取り除く
(下)海底に新しくスクリューパーイルをねじ込む
『横浜港棧橋震害復旧工事概要』より



クレーン船による岸壁復旧作業
1923(大正12)～24年



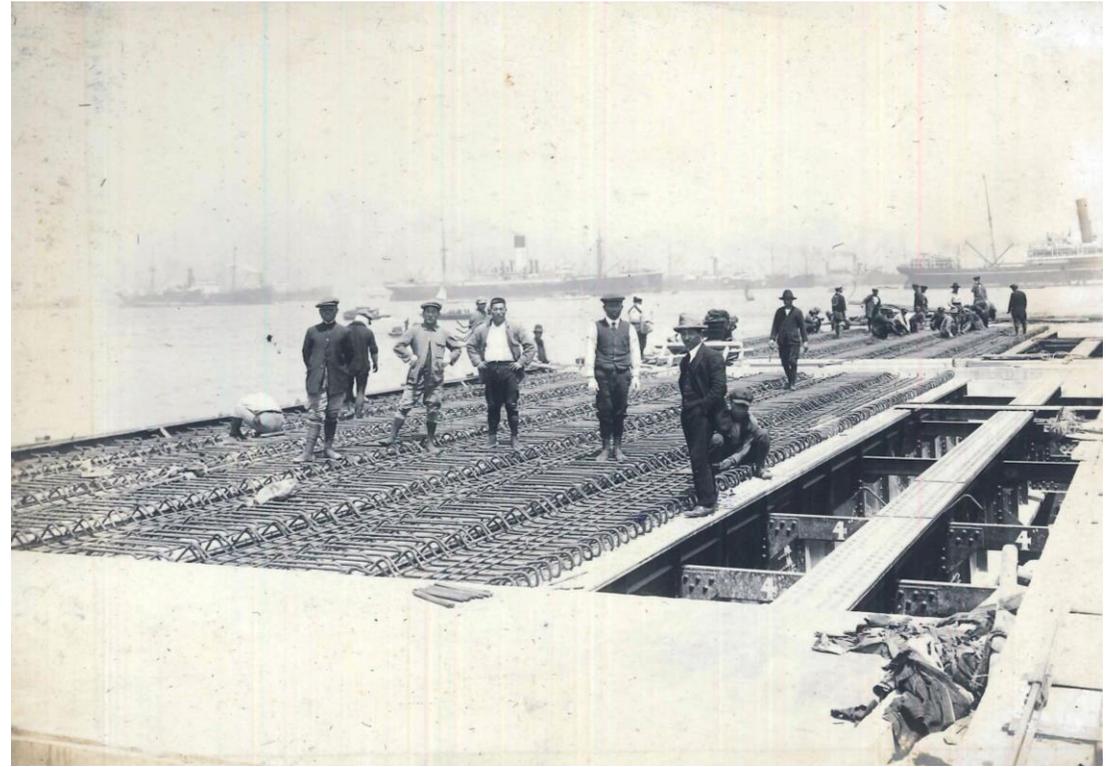
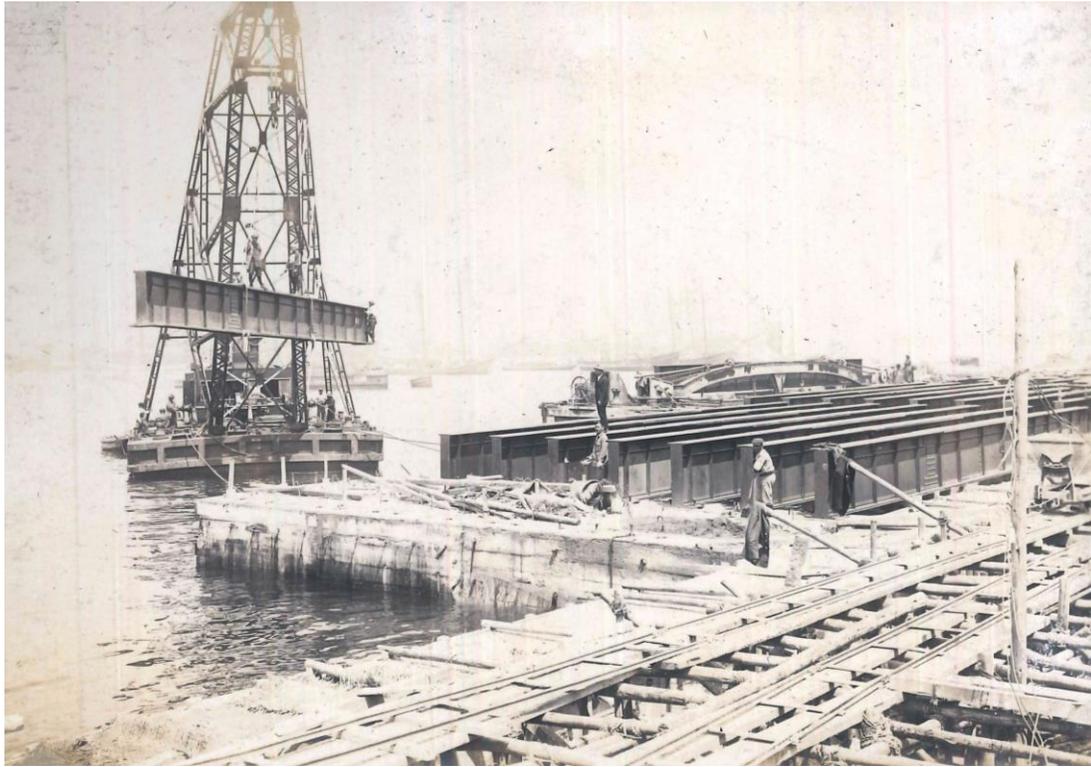
1号岸壁の岸壁復旧作業が
1923(大正12)～24年



新港倉庫前物揚場復旧工事
1923～24年



崩れた岸壁とボラード
1923～24年



9、10、11号岸壁では、復旧工事の速成のため、横棧橋(陸地に並行に作られる棧橋)方式を採用した、橋脚にはコンクリートケーソンを使用した



- ・安芸は横浜港復旧工事の第1要件として工事進捗の急速さ、同時にその構造の強固さ、耐震的であることを挙げている

- ・1924(大正13)年5月には、復旧した新港ふ頭9号岸壁に日本郵船の貨客船鹿島丸が着岸。復旧した岸壁を利用した第1船

- ・速成工事により完成した岸壁から利用開始、外国貿易港としての命脈を保つ。

- ・横浜港は震災前より、強固で使いやすい港に生まれ変わっていた。復旧工事により、横浜港には新たに埋立地約10,400㎡が増加、岸壁延長も延び、水深も深くなった。安芸はこれが震災復旧工事の思わぬ副産物だったと述べている

3 大蔵省による震災復旧工事

復旧した横浜港の港湾施設



A 188 復旧した左突堤 「横浜税関陸上設備震災復旧工事概要」より



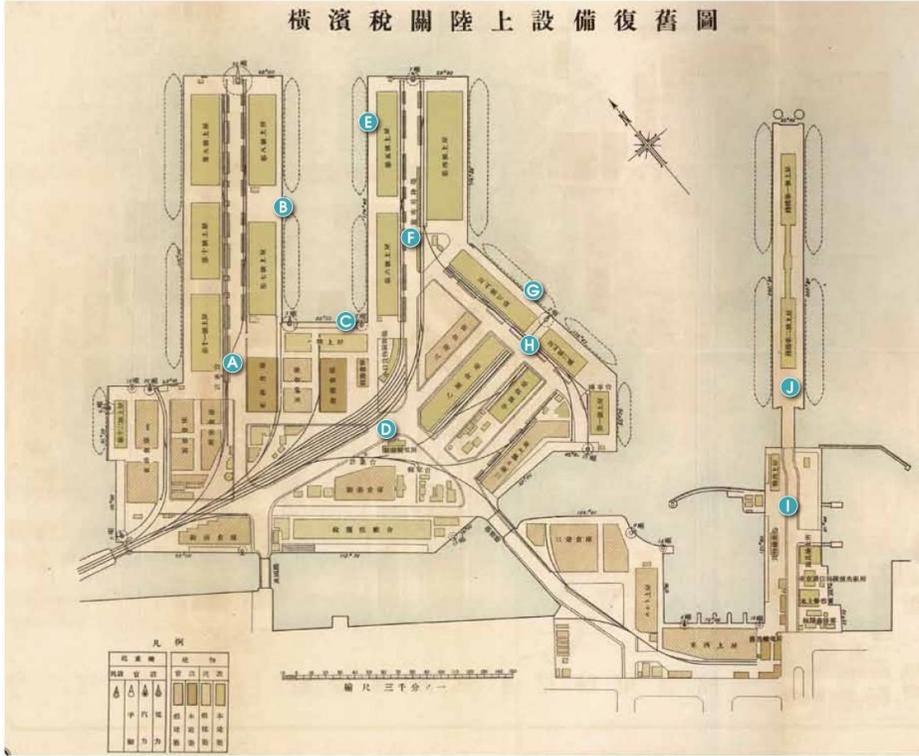
B 185 復旧した7、8号岸壁 「横浜税関陸上設備震災復旧工事概要」より



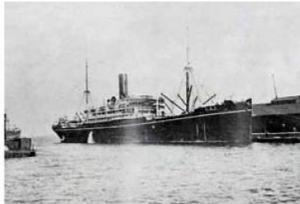
C 192 新しく設置された起重機 「横浜税関陸上設備震災復旧工事概要」より



D 189 復旧した右突堤 「横浜税関陸上設備震災復旧工事概要」より



168 横浜税関陸上設備復旧図 1931(昭和6)年 「横浜税関陸上設備震災復旧工事概要」に加筆



E 194 竣工した5号岸壁 「横浜震災復旧工事報告」より



J 187 復旧した大さん橋と上屋 「横浜税関陸上設備震災復旧工事概要」より



F 193 竣工した鉄道旅客昇降場 「横浜税関陸上設備震災復旧工事概要」より



G 184 復旧した3、4号岸壁 「横浜税関陸上設備震災復旧工事概要」より



H 186 復旧した甲号倉庫 「横浜税関陸上設備震災復旧工事概要」より



I 191 完成した大さん橋 「横浜税関陸上設備震災復旧工事概要」より

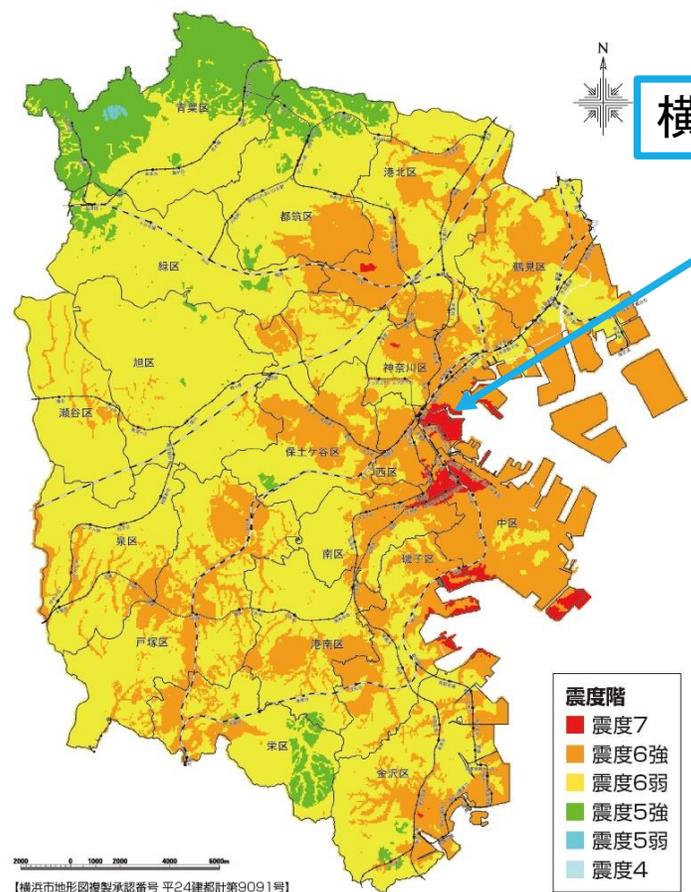
・内務省による工事が完成した部分から、大蔵省直轄による陸上設備の復旧工事が開始。

・ふ頭内の倉庫・上屋の新設・補修、道路、鉄道、水道、下水、電気設備、起重機類の復旧、旅具検査場などの新設、曳船・小型蒸気船の新設なども復旧工事に含まれ、工事範囲は多岐にわたった。

・陸上設備工事は国の財政状況により予算が改定され、事業年度も当初計画より三か年延長した。震災復旧工事は、1930(昭和5年)度に全工事が竣工した。

■企画展概略

震災の教訓を生かして



横浜みなと博物館

元禄型関東
地震想定地
震マップ：横
浜市全域
2012(平成
24)年 横浜
市提供



日本丸メモリアル
パークに設置
されている津波
被害情報板



当館前の交差
点に設置されて
いる海拔表示

2館連携 よこはま防災クイズラリー

・日程 8月26日(土)～11月5日(日)の企画展会期を通して実施

・内容 横浜市民防災センター、横浜みなと博物館の2館の展示の中から出題されるクイズを解く。2館を見学し、全問正解した人にプレゼントを贈呈



横浜市民防災センター

横浜みなと博物館

2館で学ぼう!

よこはま防災クイズラリー

8月26日(土)～11月5日(日)
2023年は関東大震災から100年です。
災害の歴史と自分たちの防災について
楽しく学んでみよう!

参加方法

- 1 横浜市民防災センターの地震火災体験ツアーに参加し、横浜みなと博物館企画展「船と港から見た関東大震災」を見学しよう。
- 2 それぞれの展示の中にあるクイズをひいて、この用紙のうらに答えを書いてね。問題はぜんぶで4問あるよ。
- 3 全部の答えが書けたら、横浜市民防災センター受付が横浜みなと博物館総合案内のスタッフに見せてね。
- 4 全問正解でステキなプレゼントがもらえるよ!

横浜みなと博物館
Yokohama Port Museum
横浜西区みなとみらい2-1-1
TEL 045-221-0280
https://www.nippon-maru.or.jp/

横浜市民防災センター
横浜市神奈川区栄楽4-7
TEL 045-312-0119
https://bo-sai.city.yokohama.lg.jp

展示をよく見て **クイズ** に答えよう!!

横浜みなと博物館

Yokohama Port Museum

企画展「関東大震災100年 船と港から見た関東大震災」を見て答えよう

(※答えは特別展示室のなかにあります)

- 1 関東大震災が起きた時、横浜港から大震災を知らせる電報を打った船の名まえはなんでしょう
- 2 関東大震災の後、全国から食べものなどの救援物資をのせた船がたくさん横浜港にきました。船の名まえを1つ書きましょう

横浜市民防災センター

横浜市民防災センターの地震火災体験ツアーを体験して答えよう

- 1 「減災トレーニングルーム」の時計は何時何分をさしているでしょう
- 2 関東大震災の発生は、昼ごはんを作る時間だったので、各家庭でいっせいに火災が発生しました。さらに〇〇によって被害が広がってしまいました。〇〇に入る言葉はなんでしょう

- この問題用紙は1枚につき、1名参加できます。
- 答えが書けたら、横浜みなと博物館総合案内、横浜市民防災センター受付で答え合わせをしてください。2館コンプリートした方に、防災や船に関するグッズをプレゼント!! ※プレゼントはなくなり次第終了とさせていただきます。プレゼントの内容は予告なく変更する場合があります

横浜みなと博物館

川崎線・市営地下鉄

ブルーライン

桜木町駅下車 徒歩5分

みなとみらい線

みなとみらい駅・馬車道駅

徒歩5分



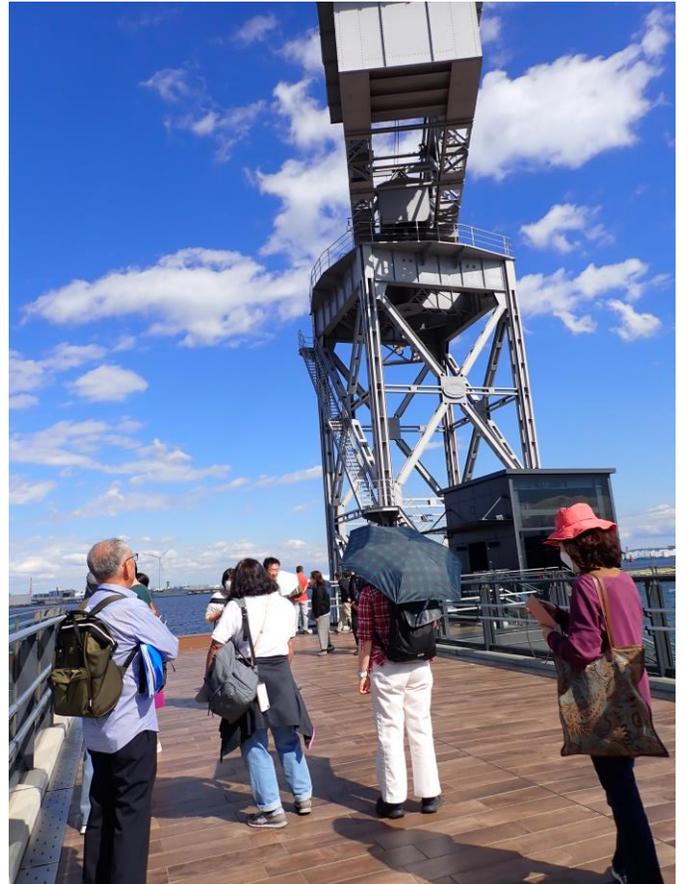
【休館日】横浜みなと博物館・横浜市民防災センターともに月曜休館(ただし、9月18日(月-祝)、10月9日(月-祝)は開館し、翌平日休館)
【開館時間】横浜みなと博物館 10:00～17:00(最終入館16:30) 横浜市民防災センター 9:15～17:00
【入館料】横浜みなと博物館 一般500円、65歳以上400円、小・中・高校生200円 横浜市民防災センター 無料

【助成】みなと博物館ネットワーク・フォーラム、一般財団法人 山縣記念財団

なるほど！ミナト散歩～横浜港周辺の 震災遺構をめぐる

- ・実施日：2023年10月21日（土）、25日（水）、29日（日）
- ・共催：NPO法人横浜シティガイド協会
- ・内容：企画展を学芸員の解説を聞きながら見学し、その後、シティガイドの案内で横浜港周辺の震災遺構をめぐる
 - ・見学場所：横浜みなと博物館（出発）→汽船道→50トンハンマーヘッドクレーン（潜水函利用岸壁含む）→新港ふ頭旧税関事務所→赤レンガ倉庫→大さん橋→インド水塔→山下公園（解散）

学芸員の展
示解説を聞
いた後、横
浜港周辺を
歩く

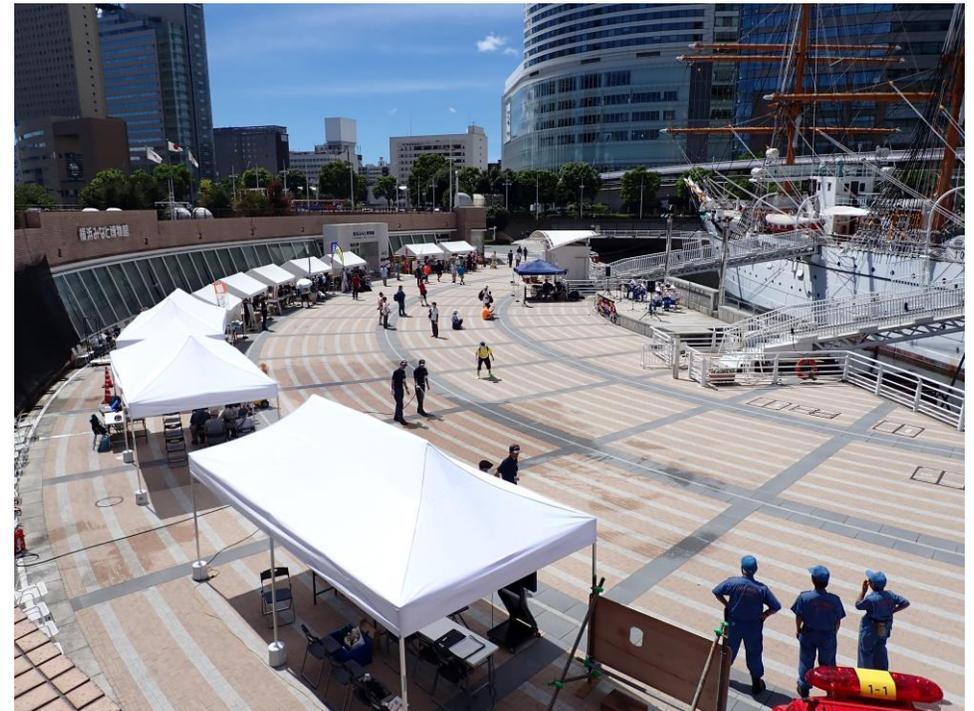


関東大震災100年～今できること～「過去を知り、未来につなげよう」 2023年9月2日(土)

主催:横浜市民防災センター 共催:公益財団法人 帆船日本丸記念財団

- ・当館から、横浜市民防災センターへ協力を依頼。同センターが年4回実施している啓発イベントのうち1回を当館のある日本丸メモリアルパークで開催した。
- ・起震車による地震体験や消防車両の展示、ミニ消防車・ミニ救急車の乗車体験、消防音楽隊の演奏など防災の大切さを楽しく学べるイベントを多数実施。

起震車体験 親子連れ
に大変人気があった



日本丸メモリアルパークを会場に実施

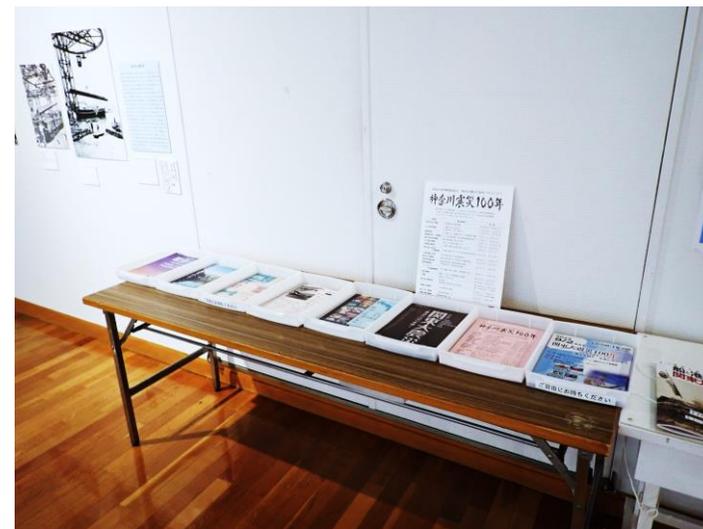
神奈川震災100年プロジェクト

- ・神奈川県博物館協会に加盟する館園のうち、関東大震災をテーマとする展覧会を開催する博物館が、展示資料や、シンポジウムの開催、特設WEBサイト設置や広報で連携。
- ・全21館が参加し、横浜では、当館の他に神奈川県立歴史博物館、横浜開港資料館、日本新聞博物館、三溪園などが参加した
- ・来館者が複数館を見学する回遊性の向上や、人文系だけでなく自然史系の関東大震災に関する研究成果が蓄積・共有された。

神奈川震災100年

プロジェクトロゴ

題字：書家 中屋啓太氏



各館、会場内に企画展チラシを設置